



季能古博物館だより

写真は左から ①北の波止 ②新波止 ③古波止 ④瀬口波止

地質博物館・能古島(5)

能古会会員

小川 誠

波止づくし

東海岸には南の城の浦と北の土手崎の間に四本の古い波止があり、南側三本の波止の付け根には満潮時を除いて岩盤の露頭が現れている。

波止はすなわち突堤である。この突堤は形式を「捨て石式傾斜堤」と言い、捨て石を台形に積み上げたもので、複数設置し、突堤群として海岸侵食の防止を主目的とするが、船溜まりとしても利用されている。

この波止の築堤年代は不明であるが、町の古老の話では子供の時からここで遊んでいたと言う。ところで、一番北の波止は名もなく露頭もないが、これは新しい波止の故であり、重機でも使った黒雲母片岩まで掘削したに違いない。

二番目は新波止(しんぱと)といい、次に新しい。潮が引けば波止の北側に玄武岩の大きな露頭がしっかりと顔を出す。

三番目は古波止(ふるぱと)で最

も古い。これも同じく波止の北側に、波止と同じ方向の北西―南東の走向で黒雲母片岩の露頭が細長く伸びている。

四番目は作った人に由来して、瀬口波止(せぐちばと)と言う。ここでは波止の南側に礫岩と砂岩の露頭が顔を出している。

一般に、防波堤や突堤を作る場合には、地形、地質、波浪、潮流、風などの自然条件が重視される。しかし、当時としては、海岸から海に伸びる堅固な露頭が存在を依り処として築堤工事を始めたことであろう。

また、波止が海岸線に斜交して南東方向に伸びているのは、北からの強い季節風と沿岸流の影響を考慮した先人の知恵と思われる。

それにしても、南側三本の波止がそれぞれ異なる岩盤を基礎としているのは興味深いことである。

これらの岩盤は「地質博物館能古島(1)」の地質図及びその後の記事で述べては来たが、繰り返すと、黒雲母片岩は能古島の基盤であり、礫岩・砂岩は基盤を覆う古



牛の水の跡

第三紀層である。また、新波止の玄武岩は噴火口の火道である。これら三本の波止は、我が「地質博物館・能古島」の目玉商品としても効果的なので、植物園のように、各地点の露頭に名札を立てたものである。

牛の水

自然公園「アイランドパーク」に牛の水^(注1)という所があるが、昔ここに牛の牧^(注2)があり、牛の水飲み場として小さな池^(注3)があったと言われている。

ここは、牧の神公園の高台を流

域として西海岸に流れる狭い谷間を堰き止め、北西―南東に伸びる堤長三五m、堤高四・二mの堤防を築いて小さなため池が作られていたが、現在はその上流側法面の中腹部が削られて幅二・五mの道路となり、さらに堤防の中央部が上幅三m、下幅二m、深さ三mの逆台形に開削されたために水が溜まることはない。

堤防を切ったのは、昭和一〇年からため池の傍に住んでいた関武雄さんだが、大雨の度に家が浸かったので切ったそうだ。また、昭和一五年にここに移り住んだ久保田のお婆さんの話では、堤防の下流約五〇mに泉があり、近くの林に落ち葉や薪取りに来た人の憩いの場になっていたと言う。

なお、「アイランドパーク」の創始者である久保田耕作さんは、ここに「牛の水」があることから水源確保の目処がつき、「アイランドパーク」開業を決心したそうだ。

今、下流の泉には小さなポンプ小屋が設置され、「アイランドパーク」の水源の一つとなっている。

(注1)「筑前国誌風土記拾遺」に、「牧跡の中に

小池あり、牛の水という。牧牛の為に掘りし池」と記載。



堤防開削部

(注2)「延喜式」に、「筑前国能臣嶋牛牧」(巻二十八兵部省の章と記載。

(注3)平成五年度に、福岡市埋蔵文化財センターで、牛の水の堤体構造の把握を目的としてトレンチ調査を行った。

福岡市教育委員会編「能古島」(遺跡発掘事前総合調査報告書三五四集一九九三年)

報告書によれば、堤防工事は三工程に分かれ、初めは地山の上に二mの盛土をし、次にその盛土の中央部を逆台形に掘り込んで粘土を入れ、最後に最上部の盛土をしたと解釈しているが、昔、ダム工事に関係した経験を持つ筆者としては、この工程の解釈には異論を唱えたい。

すなわち、このため池は形式を中心コア型アースダムと言われるもので、初め、地山にダム中央部の底を掘り込み、粘土で盛土をす(報告書のように盛土を掘り返すのは無駄)。次に中央部とその

上、下流の盛土をそれぞれ同時に立ち上げて行く。こうして築堤工事を完了するが、この工程は昔も変わらないと思うのである。

古井戸

「教会前」バス停から北へ二十m、道路際から東へ一〇m、雑木林の中にその古井戸がある。

井戸は内径七〇cm、深さ二・五m余り、水位一・四五m(水路底と同じ)、井戸枠は深さ一・三mまで玄武岩の空石積み、以下は玄武岩風化帯を素掘りのままである(五月二日)。

この古井戸の一〇m南側に永田久雄さんが現在使用中の井戸(深さ七m、水位三・六m)があって、道路にはほぼ平行して十m間隔で二本の井戸があり、古井戸は南側の井戸より三m程低い位置にある。水位も〇・八五m低いので地下水が南から山成りに流れていて、下方の古井戸は豊富な地下水に恵まれていたことが推察される。

井戸の由来を尋ねると、ここは(4)で述べた弁当岩から六〇mの至近距離にあることから、黒田公が鹿狩りで島に来られて弁当岩で休憩の折、お茶の接待のために掘



古井戸

られた井戸ではないかとのことである。
 永田さんの井戸は湧水量が多いので、下の弁当岩の傍の自宅までパイプを引き、サイフォンで自然流下させているとのこと、これは省エネの見本とも言えるであろう。

加えてここは玄武岩台地の北端に近く、バス道路がその台地の西側に沿って南北に通る、稜線を越えた台地の東側は大泊海岸に続く谷の谷頭が迫っている。また、古井戸の傍一m東にはコンクリート

の水路(幅一・四m、深さ一・四五m)があり、北東に流れて大泊海岸に注いでいる。

なお、この一帯は貯水能力の高い玄武岩台地の縁辺部に当たり、地下水位も高いと思われるが、大泊海岸に注ぐコンクリート水路が古井戸の傍にできたことで、当時、この付近の地下水事情に大きな変化のあったことが推定される。

すなわち、水路掘削以前は現在よりも高かったであろう古井戸の水位が、直近で行われた水路の掘削により、その掘削深度まで急激に下ったであろうと。

数は少ないが四月上旬〜五月上旬の水位データに基づき大胆な考察をすれば、古井戸は流域及び排水能力の高い水路の影響を受け、降雨後の水位上昇及び晴天後の水位降下は緩慢で、その変動幅は小さい。

一方、永田さんの井戸は小流域のため、降雨との連動が考えられるが、個人使用もあるために明確でない。

(次号に続く)

▼5月28日〜6月2日、アクリス福岡にて「1960〜80年代 福岡 美術家たち展」が開催されます。当館所蔵の「谷口コレクション」80余点が展示されると同時に、谷口治達(28日)・高田茂廣(29日)両先生に御講演していただきます。ふるってご参集いただければ幸いです。

事務局
 こぼれ話

先日、今宿亀井家に訪問する機会を得た。亀門学は儒学であるから、御家族の方々もいわゆる「剛毅木訥」な方々で、自堕落な日常を送る私にとって訪問前まで多少の不安があったが、ご主人の準輔氏をはじめ奥様の秋子氏も共に物腰柔らかく気がさくであり、その不安は直ぐに消え去った。

特に準輔氏は亀井家に関することとはもとより、福岡地方史全般において造詣が深い方であった。当

家が旧唐津街道沿いに位置することもあり、今宿近辺の宿場のことや、付近の「小字」の由来についていくつかの質問を受けたが、適切に返答することができず次回お会いするときにまでの課題となった。

「閨秀 亀井少琴伝」の「年譜」によれば、今宿亀井家は少琴が夫源吾(雷首)と文政七(1824)年に移り住んだ家である。家屋は改築されていたが、幸い当時使用していたと思われる井戸を見ることができた。この井戸は、準輔氏の御説明によれば、嘉永年間の設置と伝えられているようで、準輔氏の記憶では井戸の底は孟宗竹が敷き詰められ、浄化作用の役割をはたしていたという。その効果のためか、昭和30年頃まで日常生活に利用していたそうであるから驚きである。

突然の訪問も快く引き受けて下さり、この場をかりてお礼申し上げます。(吉田)

亀井家学を支えた女たち(6)

少稜(昭陽長女友) 中の上

福岡地方史研究会々員

早船正夫

◆結婚—艶詩(恋文の漢詩)の応酬

友(以下少稜と称する)は十九歳で結婚する。相手は三苦源吾、後に雷首と号する。二十歳。亀井昭陽の内弟子である。

少稜と雷首の結婚を話題とする際、次を認めるかどうかは別として、必ずといってよい程出てくる挿話に、艶詩の応酬がある。

〔伝・雷首から少稜へ〕

二八 誰家女
嬋娟真可憐
君無王上点
我為出頭天

(口語訳)

二八(十六歳)どの家の娘か美しくたおやか、本当に可憐貴方に王上の点があれば私が出頭の天になりますよう

(注)王上の点出頭の天ともに：主Ⅱ夫

〔伝・少稜から雷首へ〕

扶桑 第一梅
今夜為君開
欲知花真意
三更踏月来

(口語訳)

日本第一の梅
今夜貴方の為に開きましょう
花の真意を知りたければ
深夜月影を踏んで来なさいな

これが本当なら、男の求愛に対して大胆に且つ艶麗に、男を誘う。まさに堂々たる第一級のラブロマンスである。

◆しかし、戯作となす説もある

第一に草稿が残されていない。御当人の述懐のようなものもない。尤も恋愛に関するものである。残されないのが本当かも。

次に二人の年齢の差が九歳。このような恋情は年齢が接近しているてこそ自然である。

二人は確かに師匠の娘と門弟の間柄であり、親の反対を押し切ったの仲と想像する向きもあるが、実は二人は再従兄弟(雷首の祖母と少稜の祖父の南冥とは姉弟Ⅱ前号の系図参照Ⅱ)であり、雷首は幼年期から亀井塾に入門、後述(次号)のように南冥も昭陽も二人を結び付けたく思っていた節がある。

このような環境にあつて、厳格な儒学者の「男女七歳にして席を同じくせず」の家庭で、あえて艶詩をやり取りする気になれるか。

◆特に少稜の艶詩は平仄に不備

少稜の詩作について平仄を付けてみると次のようになる。

○は平字、●は仄字、◎は韻である。
扶桑 第一梅 ○○○●●○○○
今夜為君開 ○○○●○○○◎
欲知花真意 ●○○○○●○○◎
三更踏月来 ○○○●●○○◎

右の第三句の二字目と四字目は平仄を不同としなければならぬのに同じである。即ち第三句の四字目の「真」が問題となる。

少稜は既に「窈窕稿乙亥」と題して漢詩九十四を一冊にまとめている。右のような初歩的な誤りをおかす筈はない。

少稜の艶詩は中国唐代の詩人杜

甫の「杜甫草堂」をまねたと思う。

舍南舍北皆春水
但見群鷗日日来
花径曾不縁客掃
蓬門今始為君開

(口語訳)

舍南舍北皆な春の水
ただ見る群鷗の日々に来るを
花径は曾って客に縁りて掃わず
蓬門今始めて君が為に開く

この詩は当時漢学を学ぶ人々には、よく知られていた。真似しやすすい言い回しとして「君の為に開く」のあたりは、慣用語でもあった



亀井少稜(画)・雷首(賛) 蟹図

能古博物館だより



亀井少栞 鶴図白題画

ろう。少栞程の教養レベルにあるものが真情を吐露したにしては安っぽい感じである。

◆亀井門下生が戯れに作り、流布した

断定はできないが、少栞の自作説は根拠が薄いように思われる。雷首の作は押韻、平仄ともに誤りは見られないが、少栞の自作説の「分ぶ」が悪いのを受けて、こちらの方も旗色が悪い。

従って私には二人の漢詩の応酬はなく、周辺の他人即ち二人の醸す雰囲気を知る門弟達(複数)の酒間の戯(ザ)れ作という気がしてならない。

◆この挿話は少栞を一般世間で有名にした

今でいえばスター的立場を獲得したようなもの。漢学界では少栞の書画詩の優れた能力は知れ渡

っていた。これに加えて、少栞に性闊達にして開放な印象を与え、親しみやすいものとして受け取られた。当時の窮屈な社会にあつて、魅力あるものとみなされた。今でいえばイメージ先行現象である。

この挿話が何時の頃から世間に広がったか判然としないが、彼女四十八歳の弘化二年(一八四五)のこと。日田の広瀬淡窓が大村藩講義から帰途、旅程を変えて唐津領から浜崎、前原を経て今宿に至った。雷首と少栞に会い、次いで百道の亀井本家に昭陽の末亡人伊智を訪れるためである。

◆少栞を早く見たかった

今宿の書齋に、淡窓が入ると同時に随行していた門人達がどやどやと、一緒に入室してしまった。この場合の礼儀として、先ず師がはいり、次の部屋に随行者が待つ。師が挨拶してから後、弟子を呼び込み、その後で一同静かに入るのが正しい。

後刻、おそらく姪浜宿で師弟が昼食した時のことであろう。淡窓は先刻の無礼を咎めた。門弟一同、返す言葉もなかったが、その内一人が「少栞を早く見たかったものですから」と。全員は心中を語られ

た思いで、相い槌をうつつようにドツト笑った。淡窓もいささか笑ったようでそれ以上言葉を出さなかった。

以上は淡窓の門弟の旅記録係の記録。原文「是日先生即座。相接而進。帰路先生曰。何不待予紹介。答曰。急於見少栞耳。一行哄然」この時少栞は結婚後三十年経ている。それでもこのような人気ぶりであった。

◆雷首は亀井の姓を称する

いわば入夫婚姻(入り婿)である。但し雷首は武士身分ではないので、藩の「諸士系譜」亀井家の項に登録される必要がある。勿論藩許を経なければならぬ。父昭陽に対する信頼もあつたであろうし、雷首の生家が怡土郡井原村(現前原市井原)の庄屋の係累に属していることで、この藩許を円滑に進めた。雷首は庶民から武士身分となった。

後「買両佩刀于江戸価四圓」即ち大小刀揃を四十両で江戸に注文してもいい。

当初は井原村に新居を建て、五年後百道の昭陽の元に移る。雷首は昭陽にとって全く気おけない最愛の酒相手で、その人柄といい「良き婿どの」であった。少栞

は父の著述の手助け、既著の筆写とともに、まだ未熟の二弟、義一郎(蓬洲)と鉄次郎(陽洲)教育の補佐、母伊智の相談相手であった。

◆「今宿亀井家」を立てる

百道に居ること三年、夫婦は今宿村に一戸をかまえた。百道屋敷内の二人の居室「好音亭」を移築した。この好音亭は井原村から百道に移したもので、二度目の移築である。



今宿亀井家全景と現存する古井戸

雷首は儒家と医家を合わせ営む「儒医兼帯」に携わることになり、少栞は雷首を助けて儒家を分担。教育と合わせて詩・書・画の分野での才能を全開させていくことになる。



(次号に続く)

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

(敬称略・順不同)

- (医)原土井病院
(株)福岡メディアカリース
(株)フルアンドエム
福岡校郵便局 鬼鞍信孝
福岡能古郵便局 西方便司
福岡赤坂郵便局 戸田正義
日清医療食品(株) 福岡支店
福岡経営管理センター
(株)サンコー
(医)恵光会原病院
(株)西日本銀行 和白支店
(株)西日本銀行 千代町支店
(株)西日本銀行 香椎支店
(株)西日本銀行 土井支店
(株)西日本銀行 新宮支店
(株)西日本銀行 箱崎支店
(株)西日本銀行 久山支店
(有)サンネット
(株)福砂屋
(株)昭和鉄工
(株)井本医科器械(株)
(医)笠松会有吉病院
(株)センタービルビジネス
(有)ウエダ建築社
九州防災工業(株)
(有)西部エーベーターサービス
(有)豊友設備
総合産業(有)
(株)ニッココトラスト
(株)メイテン

関敏巳様
香立スミエ様
たくさんの花樹を頂戴し、
誠に有難うございました。

〔協賛会員〕

- 松本盛二 ③
南 誠次郎 ⑫
中山 重夫 ⑦
菅 直登 ⑧
早船 正夫 ⑪
浄満 寺 ⑪
奥村 宏直 ⑦
笠井 靖邦 ⑦
荒木 光正 ⑤
安倍 光正 ⑤
亀井 准輔 ⑩
熊谷 雅子 ⑥
石橋 観一 ⑫
木原 敬吉 ⑥
坂田 貞治 ⑥
庄野 國雄 ⑦
森田 英子 ⑧
永井 功 ⑦
緒方 健 ⑧
浦上 健 ⑧
山本 稔 ③
田中 貞輝 ③
武内 隆泰 ②
白水 義晴 ②
石野 智恵子 ⑪
翠川 文子 ⑥
多々 羅節子 ⑪
熊谷 豪三 ②
有 崎 勉 ①
山崎 拓 ①
七 熊 太郎 ⑦
西喜 寛子 ⑦
片桐 寛乃 ⑤
具島 菊乃 ⑤
瀧 栄三郎 ③
西村 俊隆 ⑥
明石 散人 ②
矢部 孝一 ②
上原 孝正 ①

〔友の会会員〕

- 立石 武泰 ⑪
伊藤 茂 ⑪
玉置 真三 ⑬
水戸 和夫 ④
木戸 龍一 ⑩
岡部 六弥太 ⑩
星野 万里子 ⑧
吉村 雪江 ⑧
安松 勇一 ⑧
上田 良一 ⑦
高田 浩二 ⑨
桑野 次男 ⑧
藤木 充子 ⑩
藤田 宏子 ⑩
板木 継生 ⑦
行成 静子 ⑪
石川 文之 ⑧
橋本 敏夫 ⑦
山内 重太郎 ⑧
齋藤 拓 ⑧
横山 智一 ⑧
古賀 清子 ⑩
宮崎 集 ⑦
西 政恵 ⑨
岡本 金蔵 ⑦
三宅 碧子 ⑪
林 金子 ⑦
星 十九樓 ⑨
宮 徹男 ⑫
安永 友儀 ⑧
織田 喜代治 ⑥
上田 博 ⑩
鶴田 スミ子 ⑦
塚本 美和子 ⑥
伊藤 康彦 ⑤
寺岡 秀美 ④
原田 穂 ⑦
奥田 穂 ⑦
石橋 清助 ⑨
井上 敬枝 ⑤
吉原 清水 ⑦
隈丸 清次 ⑦

- 吉富とき代 ⑤
浜野信一郎 ⑤
大山 宇一 ⑥
葉山 貞志 ⑥
川島 貞雄 ⑥
岸 洋子 ⑨
柳山 美多恵 ⑦
久芳 正隆 ⑧
半田 耕典 ⑥
武藤 瑞 ④
庄山 雅敏 ⑥
吉田 洋一 ⑤
永岡 喜代太 ⑦
神戶 純子 ④
渡辺 美津子 ⑤
山田 博子 ⑦
山崎 元治 ⑧
吉瀬 宗雄 ⑪
古賀 義朗 ⑩
市丸 富一郎 ⑦
市丸 嘉徳 ②
豊島 嘉徳 ②
守野 陽一 ⑦
庄野 祥二 ⑤
窪田 孝子 ①
田中 達也 ⑪
甲本 政宏 ⑥
田本 裕美子 ②
瀧井 哲郎 ⑩
大塚 博久 ⑦
小山 富夫 ⑨
辻本 雅史 ⑤
松田 清 ⑦
杉浦 五郎 ⑦
中野 晶子 ⑦
大谷 英彦 ④
野崎 逸郎 ⑥
住本 露 ③
山根 ちす子 ⑪
村山 吉廣 ⑧
住本 直之 ③
大島 節子 ④
間所 ひさ子 ⑮
伊藤 英邦 ①
鹿毛 光子 ①
古賀 朝生 ②
井上 雷策 ②
田中 寛治 ②
土屋 伊雄雄 ①
白井 京子 ⑦
原 礼子 ①
小堀 百合子 ①
原 康二 ①
原 牧子 ①
杉 みどり ③
原 祐一 ③
山下 清久 ②
杉原 正毅 ④
大久保 昇 ②
党 隆雄 ④
福澤 昌弘 ②
小嶋 幸雄 ③
樋口 陽一 ②
片桐 淳二 ⑦
木下 勤 ⑧
酒井 カツヨ ⑧
島 紀博 ③
田上 義子 ⑧
中畑 孝信 ⑧
西島 道子 ⑮
西嶋 洋子 ⑧
村上 靖朝 ⑧
村 魁 ⑧
木原 光男 ⑤
鈴木 健次 ⑦
田中 恵津子 ④
富永 紗智子 ①
吉村 陽子 ⑦
松本 雄一郎 ⑦
石橋 善弘 ④
徳重 謙 ①
岩淵 謙治 ⑦
岸本 正勝 ②
武田 正勝 ②
近藤 雄文 ③
西崎 政司 ④
權島 克信 ⑤
丸橋 秀雄 ⑤
井上 清 ⑦
上杉 和稔 ①
木村 秀明 ⑤
富田 英寿 ⑥
野上 哲子 ①
益尾 天嶽 ⑥
小山 正文 ①
石橋 正治 ①
龜野 忠行 ②
萩野 一枝 ②
松尾 清美 ②
森 正博 ②
森 祐行 ②
吉安 睿子 ①
村上 牧 ②
小谷 修一 ②
阿部 昌弘 ②
結城 進 ①
永石 順洋 ③
重松 史郎 ①
藤吉 マツ子 ②
亀井 勝夫 ②
岸川 龍 ①
山本 光玄 ②
吉開 史朗 ①
田中 靖高 ①
香立 スミエ ①
藤瀬 三枝子 ②
野見山 実 ①
友原 静生 ①
森口 智子 ①
山本 信行 ①
山見 商会 ①
尾澤 健 ①
井上 陽一 ①
寿美 鈴子 ①
寿美 陽氣 ①
矢野 鈴子 ①
藤崎 和子 ①
宮崎 正直 ①

能古博物館ご案内
開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
(092) 883-2887
FAX (092) 883-2881
ホームページ http://www.nokonet.com/museum
メールアドレス museum@nokonet.com

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
財団法人 能古博物館
納入方法 郵便振替 01730960970
〔資金援助を受ける〕
館維持、資料収集、施設整備等の
〔館の活動、館誌購読と催事企画に参加〕
(法人)年間3万円(何口でも可)
(個人)年間1万円(何口でも可)
友の会 年間3千円(何口でも可)

能古博物館の会
※新規の御加入(先号以後、平成十四年五月十五日現在)を、記載いたしておりますので、何卒ご芳名をご確認ください。
自然と文化の小天地創造
ありがとうございました。